

マルクス・エンゲルス選集

第八卷

中國とヨーロッパにおける革命 中國貿易
英華紛争 極東におけるロシアの成功
東インド會社の歴史と活動の成果
イギリスのインド支配 インドの反乱
中國・インド問題にかんする書簡

中國・インドおよび植民地問題

マルクス＝エンゲルス選集

第 8 卷

マルクス・レーニン主義研究所編

中國・インド
および
植民地問

大月書店刊

一九五四年二月十五日 発行

第八卷 定價 四二〇円

編集者

マルクス・レーニン主義研究所

発行者

東京都文京区本郷一丁目一五番地
小林直衛

印刷者

東京都文京区柳町二六番地
山元正宜

発行所

東京都文京区
本郷一丁目一五番地

大月書店

電話小石山(92)三〇九一
番
振替・東京一六三八七番

凡 例

一 原註は（原註1）等と標示し、その註釈文はそれぞれ註を必要とする個所の直後に、訳者による註は（1）（2）等と標示し、その註釈文は（註1）（註2）等として各論文、手紙の末尾に一括してつけた。なお簡単な訳註は「……」として六号活字で本文中に挿入した。訳文中（……）の部分はすべて原文にある挿入句である。

二 原文で一般的に使用されている國語以外の原語は、原則としてその訳語の直後に（……）で挿入した。

三 引用文は「……」で、引用文中の再引用箇所は「……」で示した。

四 著書、新聞、雜誌その他の出版物の書誌名は『……』で示した。

五 原文のなかで斜字体イタリックまたは隔字体ゲルムになっている箇所は、訳文では傍点をつけて標示した。

六 地名、人名はなるべく現地イタリックの発音にちかく表記することを原則としたが、従来の慣用をも考慮した。

七 手紙は主題に関係のある部分だけの抄訳にとどめ、訳文の文調も手紙であることに格別の考慮をはらっていない。

八 本選集の訳文は、それぞれの訳者が担当し、校訂者によって、原典と各國語訳とを逐語的に参照し、内容上と用語用上との校訂がなされ、文章的にも一應の統一がはかれたうえ、なったものである。

中國・インドおよび植民地問題

目次 第八卷

中國問題

中國とヨーロッパにおける革命 (マルクス)	一
中國における軍事行動にかんする議會討論 (マルクス)	二四
英華紛争 (マルクス)	三四
パーマストン内閣の敗北 (マルクス)	元
中國におけるイギリスの行爲 (マルクス)	四
中國におけるイギリスのあらたな出兵 (エンゲルス)	四
ペルシャと中國 (エンゲルス)	五
來るべきイギリスの選挙 (マルクス)	六一

阿片貿易 (マルクス)	六
極東におけるロシアの成功 (エンゲルス)	六
英華條約 (マルクス)	六
あらたな中國戰爭 (マルクス)	一〇
中國との貿易 (マルクス)	一三
イギリスの政策 (マルクス)	一三
中國問題 (マルクス)	一四
附 中國問題にかんする手紙から	

一 マルクスからエンゲルスへ (一八五八年十月八日)	一四
二 エンゲルスからダニエルソンへ (一八九四年九月二十二日)	一四
三 エンゲルスからゾルゲへ (一八九四年十一月十日)	一四

インド問題

東インド會社の特許狀 (マルクス)	一五
-------------------------	----

東インドの改革 一 (マルクス)	一五
インドにかんする議會討論 (マルクス)	一六
東インドの改革 一二 (マルクス)	一七
インドにおけるイギリスの支配 (マルクス)	一八
東インド會社、その歴史と活動の成果 (マルクス)	一九
インドの統治 (マルクス)	二〇
イギリス、インドの土着貴族と土侯 (マルクス)	二一
インドの狀態 (マルクス)	二二
イギリスのインド支配の將來の結果 (マルクス)	二三
インドの反乱 一 (マルクス)	二四
インド問題 (マルクス)	二五
インドにおける拷問の調査 (マルクス)	二六
インドの收入 (マルクス)	二七
來るべきインド公債 (マルクス)	二八

インドの反乱 二（エンゲルス）	二五九
イギリス人によるアウド王國の併合（マルクス）	三五五
インドにおける農業問題（マルクス）	四〇四
インドの租税（マルクス）	四一〇
インド財政の大破綻（マルクス）	四一八
インドの財政危機（マルクス）	四四四

中央アジア問題

アフガニスタンにおけるイギリスとロシア（エンゲルス）	四三二
ペルシャとの條約（マルクス）	四四〇
中央アジアにおけるロシア（エンゲルス）	四四六
附 東洋の社会制度にかんする手紙から	
一 エンゲルスからマルクスへ（一八五三年五月二十四日頃）	四五九

アイルランド問題

- 二 マルクスからエンゲルスへ（一八五三年六月二日）……………四六六
- 三 エンゲルスからマルクスへ（一八五三年六月六日）……………四六九
- 四 マルクスからエンゲルスへ（一八五三年六月十四日）……………四七三
- イギリス——アイルランドの小作権（マルクス）……………四七六
- 強制的海外移住——コシュートとマツツイーニ——亡命者問題——
- イギリスにおける選挙の腐敗——コブデン氏（マルクス）……………四七七
- アイルランドの復讐（マルクス）……………四七八
- アイルランドの激動（マルクス）……………四九三
- アイルランド問題について（エンゲルス）……………五〇〇
- 附 アイルランド問題にかんする手紙から
- 一 エンゲルスからマルクスへ（一八五六年五月二十三日）……………五〇九
- 二 マルクスからエンゲルスへ（一八六七年十一月二日）……………五二三

附 植民地問題にかんする手紙から

三	マルクスからエンゲルスへ（一八六七年十一月三十日）……………	五三
四	マルクスからクーゲルマンへ（一八六六年四月六日）……………	五二六
五	マルクスからエンゲルスへ（一八六八年十月十日）……………	五三八
六	エンゲルスからマルクスへ（一八六九年十月二十四日）……………	五九
七	マルクスからエンゲルスへ（一八六九年十一月十八日）……………	五〇
八	エンゲルスからマルクスへ（一八六九年十一月二十九日）……………	五三
九	マルクスからクーゲルマンへ（一八六九年十一月二十九日）……………	五三
一〇	エンゲルスからマルクスへ（一八六九年十二月九日）……………	五二六
一一	マルクスからエンゲルスへ（一八六九年十二月十日）……………	五二七
一二	國際労働者協会總評議會から在ジュネーヴ・ラテン系スイス人連盟 協議會にあてた回狀（マルクス執筆——一八七〇年一月十六日）……………	五三〇
一三	マルクスからマイヤーとフォークトへ（一八七〇年四月九日）……………	五三三
	エンゲルスからカウツキーへ（一八八二年九月十二日）……………	五三七

中國問題

中國とヨーロッパにおける革命（マルクス）

——『ニューヨーク・デイリー・トリビュン』

一八五三年六月十四日号所載——

人類の運動をみちびく原理に思いをひそめたきわめて考えぶかい、しかし空想的なある思想家は、自然を支配する神秘の一つとして、いつも彼のいわゆる兩極端の一致の法則を強調した。「兩極端は一致する」という通俗的な諺は、彼の考えによれば、生活の全領域にわたる力強い一大眞理であつて、それはケプラーの法則やニュートンの大発見が天文学者になくてならぬように、哲学者にはなくてはならぬ公理なのである。

「兩極端の一致」がそれほど普遍妥當な原則であるにせよないにせよ、いずれにしても吾々は、中國革命が文

明世界におよぼすと思われる影響のうちに、この諺の適切な例を見るのである。ヨーロッパにおける次の人民反乱、共和主義的自由と安價な政府とのための次のヨーロッパの運動は、おそらく何か他の現存の政治的契機以上に、いなロシアの脅威やそれと関連する全ヨーロッパ戦争の危険以上にさえ、現在ヨーロッパの対極であるこの天國〔中國〕でおこなわれていることによって左右されるであらうなどといったら、はなはだ奇妙な、はなはだ逆説的な主張に聞えるかもしれない。しかし、事態を注意深く觀察すればわかるとおり、これはすこしも逆説ではないのである。

中國においてこの十年間もつづき、そしていま擬って一大革命となつてゐる慢性的な反乱⁽⁴⁾の社會的原因が何であれ、またそれがどんな宗教的、王朝的または民族的形態をとるにせよ、その勃発の最後の動機をあたえたものは疑いもなく、吾々が阿片と呼んでいる麻酔劑を中國に押しつけたイギリスの大砲⁽⁵⁾であつた。イギリスの武器の前には、滿州王朝の威信ももうい火絨^{ほくじ}のように崩れ去つてしまつた。天上帝國の永遠性にたいする迷信的な確信もくだけてしまつた。文明世界にたいする野蠻な隱遁者的な鎖國の中へくさびが打ちこまれた、そしてそれ以來カリフォルニアおよびオーストラリアの金の引力によって急速に發達した交通は自由な軌道をあたえられた。同時に中國の生血である銀貨が英領東インドへ流出しはじめた。

それまで貿易のバランスでは中國はずつと受取勘定をつづけてきた。一八三〇年までは、インド、イギリスおよび合衆國から中國へたえず銀が流入した。一八三三年以來、ことに一八四〇年以來、中國からインドへの銀の輸出は、天上帝國をほとんど消耗してしまふ量に達した。そこで阿片取引を禁ずるきびしい勅令が發せられたのであるが、この勅令にたいする答えは、皇帝の方策にたいするさらにはげしい反抗であつた。この直接的經濟的

結果のほかに、阿片の密貿易とむすびついた賄賂制度は中國の南部諸省の官吏をすっかり墮落させてしまった。

皇帝が、通常全中國の父とあがめられていたように、皇帝の官吏もその所轄の地方の父と見なされていた。この巨大な國家機構をむすびつけていた唯一の道德的紐帶であるこの族長的權威は、阿片密貿易を援助してぼろい儲けをした官吏の腐敗によってしだいに崩されていった。このことは、主として、反亂の勃発したおなじ南部諸省でおこった。阿片が中國人を支配してゆくにつれて、皇帝とその幕僚の固陋な大官たちがその支配を失っていたことは、おそらくいうまでもないところであらう。歴史がこの國の全人民をその傳統的な鈍感からゆりおこす以前にまず彼等を陶醉させねばならなかった、とでもいった様子であった。

これまでまったくなかったイギリスの綿製品と、これよりはすくないが、イギリスの毛織物の輸入は、對華貿易の独占が、東インド会社から個人貿易に移った一八三三年以來急激に増加し、他の國民、ことにわが合衆國も對華貿易に参加するようになった一八四〇年以來、この増加の程度はさらにいちじるしくなっている。外國の工業製品のこの輸入は、中國の土產工業にたいして、以前に小アジア、ベルシャおよびインドにたいしてあたえたとおなじ影響をあたえた。中國では、紡績工や織工はこの外國の競争のもとにひどく苦しみ、國家全体もそれに應じて衝撃を受けた。

一八四〇年の敗戦後イギリスに支拂われねばならなかった賠償金、高額の、不生産的な阿片消費、この取引によってひきおこされた貴金屬の流出、國內の製造工業にあたえた外國の競争の破壊的な影響、行政の腐敗は、次の二つの結果をまねいた、——すなわち、一方では旧來の租税はいっそう庄迫的で苦痛なものとなり、他方では旧來の租税に新しい租税が附加されたのである。たとえば吾々は「ベキン、一八五三年一月五日」附の皇帝の

布告中にウーチャン〔武昌〕およびヘンヤン〔漢陽〕等の南部諸省の總督および巡撫にたいする命令として租税を免除または猶予し、とくにどんな場合にも通常の額以上とってはならない、と述べた命令を見いだす。なぜなら、これをゆるせば、同布告にいうように、貧民は「どうしてそれに堪えることができるか？」といっている命令を見いだすのである。「かくして」と皇帝はつづける、「朕の國民は一般的な困苦の時代において租税徴収者に追求され苦しめられる災厄から解放されるであらう」。吾々は、一八四八年に、ドイツの中國ともいうべきオーストリアからかような言葉とかような讓歩とを聞いたことを思いだす。中國の財政、習慣、産業および政治機構と同時に影響をあたえたこれらすべての分解的要因は、皇帝の權威を完全に失墜させ、この天國に地上の世界との接觸を強いたイギリスの大砲の圧迫によって、一八四〇年に完全に發展するにいたつたのである。完全な孤立ということが旧中國維持の根本的な條件であつた。いまやイギリスのはたらきかけでこの鎖國に強力的な終末が準備され、密閉された棺に保存された木乃伊が新鮮な空氣にふれるとたちまち崩れてしまうのとおなじように、この瓦解もまた必至の運命にあるのである。いまイギリスが中國に革命をひきおこしたのち、この革命がまたどのような反作用をイギリスに、そしてイギリスをつうじてヨーロッパにおよぼすであらうか、という問題が生ずる。この問題にこたえるのはむづかしいことではない。

吾々は、しばしば読者の注意を、一八五〇年以來のイギリスの製造工業の比類のない発達に向けてきた。驚くべき好景氣の最中にも迫りくる工業恐慌の明白な兆候を告げることも困難ではなかつた。カリフォルニアやオーストラリアがあるにもかかわらず、莫大な、未曾有の海外移住がおこなわれたにもかかわらず、特別な事件がおこらないかぎり、一定の期間の後にはつねに、市場の拡張もイギリスの製造工業の拡張に追いつくことができる。

い瞬間がくるであろう、そして以前おこつたとおなじように、この不釣合は不可避免的に新しい恐慌をひきおこすにちがいない。そのうえなお最大の市場の一つが突然萎縮するならば、恐慌の到来はそれによって必然的に早められるであろう。中國の反乱は、いままさにかような影響をイギリスにおよぼしたのである。新市場開発、または旧市場拡張の必要は、イギリスの茶関税引下げの主な原因の一つをなしていた。茶の輸入が増加するにつれて、中國むけ工業製品の輸出が増加することが期待されていたからである。イギリスの對華輸出年價額は、一八三四年の東インド会社の貿易独占廢止以前には、わずかに六十万ポンドにすぎなかったが、一八三六年には一、三二六、三八八ポンドに達し、一八四五年には二、三九四、八二七ポンドに、そして一八五二年には約三百万ポンドに達した。中國から輸入された茶の量は一七九三年には一六、一六七、三三一〔重量〕ポンドにすぎなかったが、一八四五年にはすでに五〇、七一四、六五七ポンドに、一八四六年には五七、五八四、五六一ポンドに、そして現在は六千万ポンド以上に達している。

最近の收穫期の收穫量は、上海の輸出表からもすで見られるように、この前の年の收穫量を二百万〔重量〕ポンドも上廻るであろう。この増加は二つの事情の結果である、——すなわち、一方では市場が一八五一年末にひじょうな不景氣に出あい、そして巨額の余剰在庫品が一八五二年の輸出に廻され、他方では、イギリスの立法府で茶の輸入にかんして企てられた修正について中國へ報告がはいってくるやいなや、手持の茶の全部はうんと引上げられた價格で、ただちに市場へだされた。これに反して、次期の收穫にかんしては事態はまったく別である。ロンドンのある著名な茶商会の次の報道からの抜萃がこれを証明している、——

「シャンハイでは、恐慌が支配している。金の價格は二五パーセント騰貴し、そして蓄積の目的で熱心に追求

さ、れて、いる。銀は取引市場からすっかり姿を消したために、碇泊しようとするイギリス船から中國の関税を取立てようとしてもすこしの銀も調達できないくらいであった。かような状態の結果、オルコック氏⁽⁸⁾は、東インド会社の爲替手形その他の確實な有價証券を引当に中國の政府当局にたいしてこの関税取立ての責任を引受ける用意があると声明している。貴金屬の不足は商業の近い將來から見てもつとも不利な要因の一つである。なぜならこの不足は、茶や絹の買手がこの國の奥地にはいり、そこで買付けをおこないうるために、これらの金屬がもつとも必要なまきにそのときに、現われるからである。そしてこの目的のためには、大量の地金が前貸いされて、生産者が耕作をつづけうるようにされている。

この季節には普通ならばすでに新茶の收穫の用意がなされているのに、現在ではまだわずかに個人の安全と財産との保護が問題にされている、——いっさいの業務が停滯しているのである。四月と五月とに茶葉を保護するための準備万端がととのつていなければ、降誕祭になつてもまだ收穫されない小麦とおなじく、紅茶、緑茶の上等種をふくむ早場の收穫も不作におわつてしまうであらう。

しかし、茶葉を保護する手段が中國の河海に碇泊している英米佛の艦隊によってあたえられるものでないことは確かである。これらの艦隊はその干渉によって逆に、茶を生産する奥地と茶を輸出する海港との間のいっさいの取引交通を断絶させるような紛糾をひきおこすだけである。したがつて、現在の收穫は價格騰貴が期待されるし——ロンドンではすでに思惑^{おもわく}がはじまっている——、次期の收穫ははなだしい不足が生じると思つてまぢがない。だが、これがすべてではない。中國人は、革命的動亂期のすべての國民のように、手持の運搬困難な商品を外國人に賣りたがっているとしても、東洋人が大きな浮沈を考えて普通やるように貨幣を退藏しはじめ、